

格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係

森山新（お茶の水女子大学）

morishin@cc.ocha.ac.jp

1. 目的

本研究は認知言語学的観点から、多義語としての格助詞デの放射状カテゴリー構造を解明し、その上でこのような多義語の意味構造と習得（第二言語習得）との関係を考察することを目的としている。

2. 先行研究

日本語の格助詞デの放射状カテゴリー構造を研究したものとしては、間淵（2000）、森山（2002、2003）などがある。

間淵（2000）は通時的調査を実施し、デの意味拡張の通時的プロセスを明らかにした。それによれば基幹的用法は場所格で、そこから手段格・様態格、さらに動作主格や原因格が派生したと述べている。

森山（2002）は格助詞デの意味構造を共時的に分析し、プロトタイプ的な用法が場所格であること、デの個々の意味は「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景を補足的に示す」といったスキーマ的意味を共有していることなどを主張した。

森山（2003）では第二言語としての日本語習得のデータを用いて、格助詞デの習得過程を解明し、デがプロトタイプである場所用法からその拡張へと習得が進むこと、習得順序は「場所 道具 様態 原因 時間用法」のようになること、個々の用法内においても具体的意味から抽象的意味へとといった習得のプロセスが見られること、などを示した。

3. 研究方法

まず、これまでの辞書や学習書、研究においてデの様々な意味・用法がどのように分類されてきたかを調べ、それをもとに以下のようなカテゴリー分けを行った（< >はカバータームとしてのカテゴリーを示し、右にその下位カテゴリーを列挙した）。

< 道具 > : 道具、手段、材料、媒体、構成要素

< 原因 > : 原因、理由、根拠、動機

< 場所 > : 場所、場（抽象的場所、場面）

< 様態 > : 動作主・対象の様態、作用・できごとの状態

< 限定 > : 範囲、数量限定、期間、時限定

< 時間 > : 時間

< 動作主 > : 動作主、動作集団

これらのカテゴリーがどのように形成されてきたかについて、プロトタイプからの拡張により放射状カテゴリー構造が形成されるとする認知言語学的観点をうい、分析を行った。

4. 分析

現実世界における空間的背景と認識世界における機能的背景



図 1

4 - 1 現実世界における空間的背景

4 - 1 - 1 場所（場所の抽象化）場

- (1) その会議はアメリカで開かれる。
- (2) 彼の計画ではこの問題は扱われていない。



図 2

4 - 1 - 2 場所（動作の抽象化・境界の焦点化） 限定（範囲・数量限定）

- (3) エベレストは世界で一番高い山です。
- (4) 30人で締め切ります。

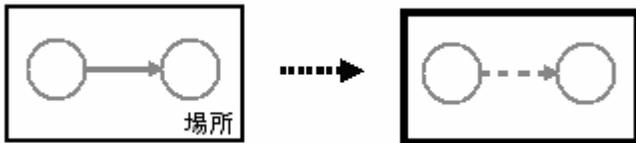


図 3

4 - 1 - 3 場所（場所の背景化）動作主

- (5) その事件は警察で捜査しています。

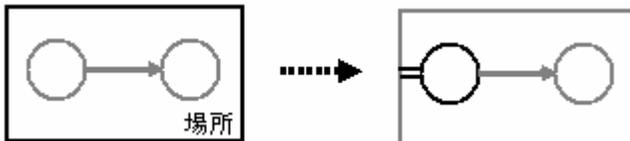


図 4

4 - 1 - 4 場所（M写像）時間（動作の抽象化・境界の焦点化） 期間・時限定

- (6) 食事のあとで、勉強をします。
- (7) 成長の過程で一時的に現れる現象です。
- (8) 長かった夏休みも明日で終わります。

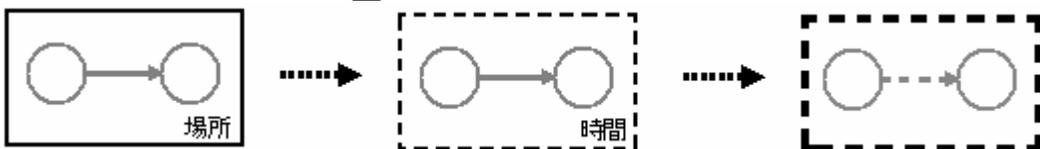


図 5

4 - 2 認識世界における機能的背景

4 - 2 - 1 場所（ドメイン主観化） 道具・手段（内在化） 材料・構成要素

- (9) 日本人は箸でものを食べる。
- (10) 毎日地下鉄で学校へ来ます。
- (11) この机は木でできています。
- (12) 日本文化の特徴という題目で論文を書きました。

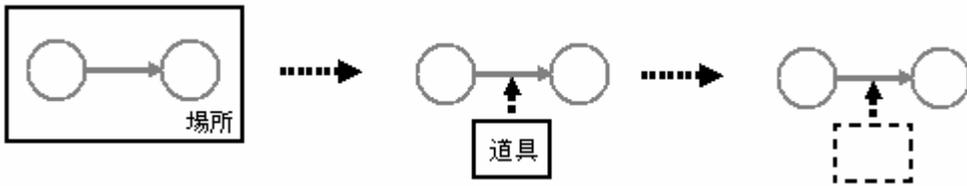


図 6

- 4 - 2 - 2 場所（ドメイン主観化）原因（主観化）理由・根拠・動機・目的
- (13) 病気で学校を休む。
 - (14) そういう点でおもしろいと思う。
 - (15) 試験の結果で判断する。
 - (16) 出張で大阪へ行ってきた。

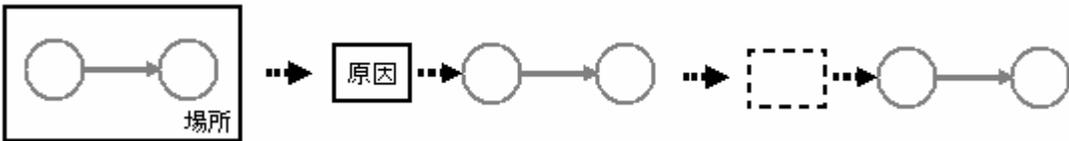


図 7

- 4 - 2 - 3 場所（ドメイン主観化）様態
- (17) 夕ご飯は自分で作って食べます。
 - (18) 迷惑にならないよう、小さな音で音楽を聞きました。
 - (19) 猛スピードで走っています。

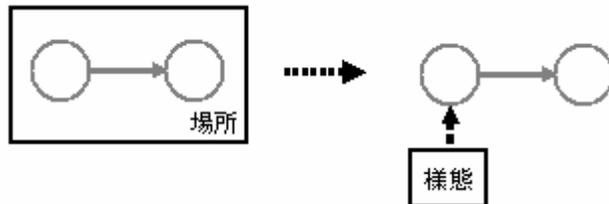


図 8

5．結果と考察

格助詞デの放射状カテゴリー構造に関し、以下のようなことが明らかになった。

プロトタイプとしての用法は「場所」用法である。

プロトタイプとしての「場所」用法において、場所、動作など一部が抽象化したり、メタファーやメトニミーの働きにより場所が背景化（動作主が焦点化）したりすることにより、「場（抽象的場所）」、「限定（範囲、数量限定）」、「動作主」などの拡張的な用法が派生する。

<時間>用法も、空間から時間へのメタファー的拡張により、プロトタイプとしての「場所」用法から派生したものである。

デを用いるにあたり、「背景」として選ばれる認知ドメインには2通りのドメインが存在する。一つは「現実世界」に依拠した客観性の高い背景ドメインで、<場所>用法の「場所」をはじめ、<限定>、<動作主>、<時間>用法の「時間」などの意味にデが使用される際に「背景」として選ばれるドメインである。もう一つは「認識世界」に開かれた主観的な背景ドメインで、これは<道具>、<原因>、<様態>の意味にデが使用される際に認知主体の頭の中にかかれるものである。

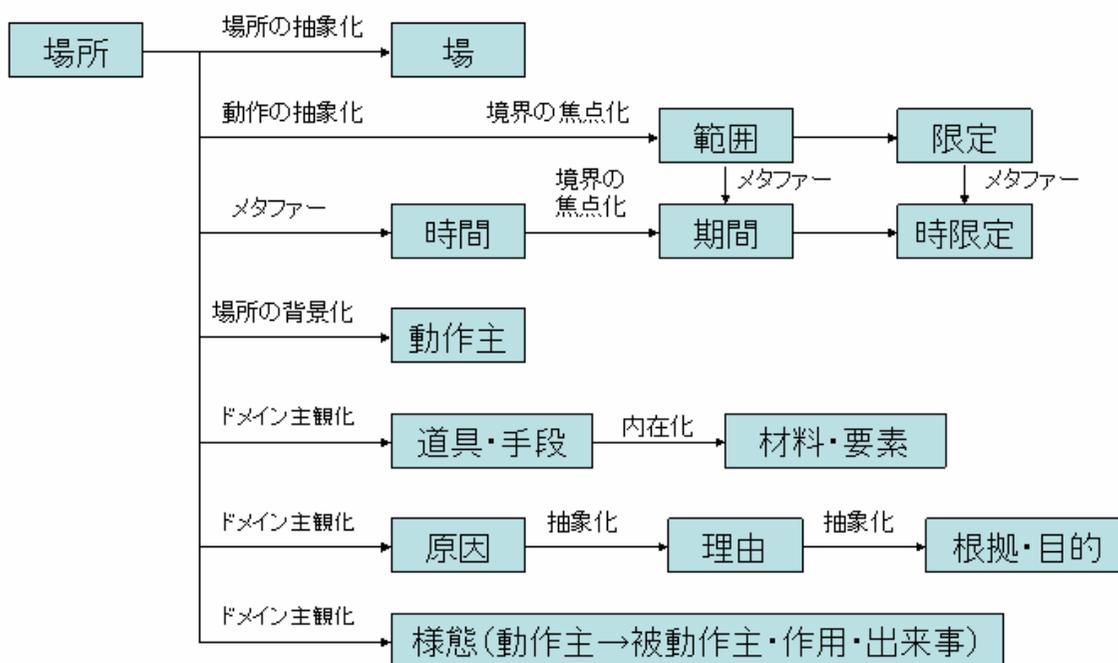
「現実世界」から「認識世界」へのメタファー的拡張によって引き起こされるドメインの主観化により、「背景」としての場所の概念が機能化し、様々な主観的なドメインが形成され、プロトタイプとしての「場所」用法から、<道具>、<原因>、<様態>などの用法が拡張している。

それぞれの用法の内部でも、抽象化や焦点化などにより、様々な用法が派生している。

分析に基づいて格助詞デのカテゴリー構造をまとめると、図9のようになるとと思われる。

このようなデの放射状カテゴリー構造と、森山(2003)の研究結果とを照らし合わせてみると、カテゴリー拡張のプロセスと、習得のプロセスとは似たような広がりを見せていることがわかる。すなわち放射状カテゴリー構造は、プロトタイプを中心に、そこから生じた様々な拡張によって放射状に広がっているが、第二言語としての日本語習得に見られる格助詞デの習得のプロセスも、基本的にそれに沿って展開しているといえる。このことは放射状カテゴリー拡張のプロセスといった認知的要因が、習得のプロセスを決定する重要な要因となっていることを示している。

図9



<参考文献>

間淵洋子(2000)「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』51、国語学会 15-30
 森山新(2002)「認知的観点から見た格助詞デの意味構造」『日本語教育』115、日本語教育学会 1-10
 (2003)「多義語としての格助詞デの習得過程：認知言語学的観点から」(準備中)